

# 人格形成小説の一考察

——生徒の成熟過程を中心に——

佐藤 洋一

## はじめに

本稿は、文学的文章指導の目標と方法について考察する一つのステップとして、児童生徒の成熟過程や受容能力のレベルが、文学作品の構造や表現、特性とどのようにかわるかについて論ずるものである。

具体的な文学作品の例として、ここではかつて中学二年生の教科書教材として用いられていた永井龍男の短編小説「くるみ割り」をとりあげる（初出は「胡桃割り」、一九四八年〈昭和二三〉七月『学生』〈第三三巻七月〉に発表された。以下、教科書採用時の表記「くるみ割り」を用いる）。中学生・高校生の成熟過程について、国語科教育の観点からみた時の特質についての分析、「くるみ割り」という小説の構造や表現の本質についての考察、そして、生徒はこの小説のどこをどのように読み、何を学んでゆくのかという点等について、主に高校一年生の「読み」の実際をあげながら論ずるものである。

以下、本稿は、次の順序で述べてゆく。

一、文学教育の問題点

二、生徒の思考と成熟過程

三、「くるみ割り」の表現の特質

(1) 「くるみ割り」と高校生

(2) 人格形成小説と心理描写

四、永井龍男の表現

尚、それ以後は、別稿として、『愛知教育大学・教科教育センター研究報告、第12号』（愛知教育大学教科教育センター刊、一九八八年三月）に発表予定である。

別稿の内容は、先行研究（実践）の検討を通して、指導上の問題点をとらえ、「くるみ割り」の構造を、少年の変容と父の「イメージ」、文体の特質等から考察すること、また、「くるみ割り」の構造と高校一年生の成熟過程との関係を、生徒の感想文の分析と考察を通して、明らかにすること等が中心となる。

## 一、文学教育の問題点

現在、「文学教育」「文学的文章」の読みと学習指導についての問題は多岐にわたっているということが出来る。問題のむつかしさの原因は、単に「文学的文章」の読みと指導の理論構築という側面のみ限定されていないところからきているのである。つまり、文学作品でなくては指導することのできない文学の特質とは何か、そして、教室で児童生徒にどのような方法で教えてゆくのか等の「文学的文章」指導の核心をめぐって、国語科教育の目標の設定や教科としての構造的な位置づけをどのように考えるのかという点にまで結びついているからといえるだろう。

すなわち、従来の「読解指導」との関係、「説明的（論理的）文章」の読みとその学習指導や言語教育としての国語科の役割とどのように関わっているのか、また、児童生徒の精神発達過程と「文学的文章」の対応、読書指導への発展をどのように考えてゆくか等とつながった問題なのである。

こうした問題を検討した典型的な研究の一つに、『文学教材をなぜ国語科授業で扱うか―第一回国語教育改革会議（全記録と資料）』（明治図書、一九八六年一月刊）をあげることができる。本書は、「文学教育」成立の根拠とその構造を考えると、いくつかから考察した研究であり、今日における「文学教育」の問題の所在とその断面を鮮明に示した一冊といえることができる。

特に大きな問題点として浮きあがっていたことの中で、次のような点は私にはとりわけ興味深く思われた。「文学教育」の概念規定の問題、文学的表現の解明、「文学的文章」の学習指導のプログラムの研究の必要性等である。また、学習者である児童生徒の精神発達の成熟過程、及び、「文学的文章」の読み方の段階や興味関心にそった学習指導なり、教材を組み立てる（開発）ことの意義もあらためて、痛感させられた点である。

文章を理解するためには、「文章と人間性の理解とが結びついた世界があり、そこでいつも物を見、物を考えているうちに分るようになる」のであって、絶えず児童生徒の現実と文章の本質の関わりを意識させながら指導してゆく必要がある。このような点については従来、常識的なこととして考えられてきてはいるものの、何をどう教えるのかという指導者側の立場が重視された教材研究（教材の特質をおさえたうえでの指導目標の考察、指導方法の研究）、教材編成等が多く、児童生徒の精神発達段階や受容能力が軽視されてきたきらいはなかったのかということである。

内発的な知的好奇心、向上心にあふれる児童生徒の成熟に対応した指導を怠り、指導者の趣味的読書紹介や、大人の「読み」の押しつけが、「国語（の授業）嫌い」や「文学」嫌いという形で国語の学習への嫌悪感を与えている例は少なくない。「熱心」で「誠実」な授業がかえって、児童生徒の興味関心をそぐ場合もあるのである。

ある人の無意識の思考を解釈して、その人が前意識にとどめておきたいと思っているものを意識させるのは、どんな場合でも有害無益だ。そして、子どもの場合は特にそうである。

(中略) 親はただでさえ、子どもにとって、自分よりずっと力が強い存在である。その上もし親が、子ども自身まだ気づいていない、その心の秘密を読みとり、隠れた感情を知ってしまうとすれば、そういう親の、際限のない支配力に対して、子どもはともて抵抗できないと感じて、うちのめされるだろう。

親と子どもの関係を、先生と生徒の關係に置きかえると、右の文章は、先生の丁寧・詳細な「指導」が、生徒から文学作品に対する興味関心を奪う危険性があることを示していると読むことができる。小説や詩の細部にわたり、結局先生の解釈が行きわたっているのは、生徒は自分で「読み」を発見する喜びも楽しみもなくなってしまうからである。

大人の解釈は正しいかもしれない。しかしそれは子どもに聞かせると、子どもが、昔話を繰り返したり聞いたり、それに就いて空想したりしながら、自力で難関をなんとかうまく切りぬけたと感じるチャンスは奪われてしまう。我々は、自分の抱えている問題を自分の力で理解し、解釈することによって、成長し、生きることの意味を見出し、自分の力に自信をもつ。他人から教えられていては、こういう成長はけっして望めない。

## 注

(1) 伊藤整「文章について」(『文章読本』河出新書 一九五四年)『伊藤整全集一七卷』新潮社 一九六九年

(2) 波多野誼余夫・稲垣佳世子『知的好奇心』(中公新書、中公論社 一九七三年)

(3) ブルーノ・ベッテルハイム(波多野完治・乾侑美子共訳)『昔話の魔力』(評論社 一九七八年) 三七ページ。

(4) 注3に同じ。

## 二、生徒の思考と成熟過程

文学作品の意義について考えることは人類の文化遺産について考えることであり(古代から現代までの文学の果たした役割)、『古典』の成立過程と今日の意味は文学の人間性へ与える影響の大きさを如実に示す一例である。人生や人間への批評・発見・新しく豊かな「経験」の獲得、感動による認識力の深化、生きる力、知恵の獲得等々と様々に、文学の教育力については語られている。例えば、桑原武夫は、すぐれた文学とは要するに「われわれの心に新しい生き方を示す、いな経験せしめることによって、われわれの諸インタレストの体系に大きな振動を与え、明日の生活に対するわれわれのインタレストのあり方を鍛えるもの——つまりわれわれを変革するもの」と述べている。

しかし、そうした結果としての教育力はいつも、文学作品を読む面白さ・楽しさという経験を通してのみ培われることは、

あたりまえのことではあるが、きわめて重要な点である。児童生徒は、文学作品を読む楽しさの豊富な体験の中でこそ、人生に対する決意や生きる勇氣・判断力等を学んでゆく。小説なら小説に対する興味関心を育て、楽しさ喜びの中から、表現の構造や効果的な描写、作家の文体の特徴（語い、イメージ等）等）に気づいてゆくものであって、決して逆ではないのである。一編の詩の詳細な分析の授業で生徒に、詩の難解さを教えこむよりも、多様なテーマの詩の表現の面白さ、詩を読む楽しさに気づかせ、そうした実感を通して、詩の本質・表現の特質や詩人の方法等を学ばせてゆくことの方がより重要なのである。第一、教室でどんなに「理解」させても、小説・詩なんて大嫌いという状態では逆効果以上の問題であることは明らかである。

このように考えてくると、学習者の思考と成熟過程、興味関心のあり方を知ることが、学習指導の前提であり、このことと教材の本質をふまえた指導が効果的に対応し、体系的な学習指導が行なわれることではじめて、国語科としての目標が達成されるのである。

ここでは、「くるみ割り」の構造と学習指導を念頭に置きながら、国語科教育の観点からみた中学生・高校生の思考と「成熟過程」の特質について述べてゆく。(1)~(8)

(1)「若き独創の危機」(フランスの心理学者モリス・ドベスの命名)と人生への出発

青少年期は、自分を家庭との関わりから解放し、大人社会

への参加者として強く意識し行動してくる時期である。そのような時期の自主性は自分を大人と同化した行為に向かわせることが多い。とりわけ、外面的な形で性急に、自己の独自性と「大人」性を示したがる。

これは、「若き独創の危機」とは、青年が社会に入ってからにあって、「自分」をはっきりと確立したいと熱望する結果、自分「独自」のものを誇示する傾向という。

はつきりいえば、自己顯示欲のようなものであるが、これは、ワッペンをついたり、小さなアクセサリーに自分の好みをだしたりすることから、自分をはつきり目だたすために、大きな演技をすることまでを含む。

「独自性」の具体例は、大人の目から見ると、無用で、時には嫌悪を感じさせるようなものを信号に選ぶところに特色がある。しかし、これは、彼等の生きるエネルギーの根源的な部分に直結したものであることを忘れてはならない。

いずれにしても、青少年が既成の社会に入っていくということは、いつの時代にも社会に対する「割りこみ」であり攪乱である。その時の「闘争の血なまぐささ」の中で性格や思想の基礎をつくってゆかなければならないのである。

(2)抽象化の能力(論理的思考力)の成長

青年期の「若き独創の危機」という現象は「抽象化」という能力、すなわち、知性の発達が一定以上に発達してこないと起こらないことが知られている。(この抽象化能力の発達の歪みに

つては(8)で述べる)

青年期からこういう高度のはたらき(形式的論理操作)ができるようになるのだが、注意すべきことは、青年期がこういう操作能力がのびてくる時期だというばかりでなく、この能力が青年の行動の中心になる、ということである。青年たちはすべてをこの能力にもとづいてやっつけていこうとする。そこには青年の良いところと悪いところが出てくるのである。

彼らは、「抽象的」思考が可能になる。いやむしろ、抽象的思考が得意となる。もつという<sup>5</sup>と、抽象的指呼しかできないくらい、抽象的思考のとりこになる。(中略)幾何の証明ができるようになるのは、中学二年のころであろ<sup>5</sup>うかが、これはまったく抽象の世界の問題である。また、「歴史」を無視して、いいことなら、いつの世でもいいはずだと主張するのは、啓蒙期の特質だが、中学生はまさにこのような議論を得意とする。彼らは、よいことでもそれを実現するには手間とひまがかかるものであることが理解できないのである。<sup>5</sup>

人生への期待や知的好奇心は、性急な理想主義や社会の「文脈」を無視した正義感等となって表われやすい。また、中学生・高校生への作文指導のむつかしさの原因の一つもこのあたりにある。未知の新しい情報を獲得したいという渴望は、未来への希望と結びついており、既知の体験や周囲の現実の中に新たな価値を発見することより、自分が知らない世界や周囲の現実と

は別の所にこそ真の世界があると思い、あこがれる傾向がある。自分の考えていることや体験したことはどうせ平凡で退屈なことにちがいない<sup>6</sup>く、作文にまとめる程の価値はない、評論家や「学者」のように難しい漢語をたくさんつけた「高級な文章」を書きたい等と思<sup>6</sup>いこんでいることが多いのである。

### (3)自己客観化の能力の未発達

青年期の「成熟過程」の著しい特色の一つに、自己客観化能力の未発達という点があげられる。これは自己未分化の状態ともい<sup>6</sup>いかえられる。成熟した人間は自己認識(自己洞察力)が正確であり、何ができ何ができないかを知っている。しかも、この能力は、ユーモア<sup>6</sup>の感覚との相関がきわめて高く、この二つはほとんど一致した能力であることが知られている。

ユーモアとは、自己批評であり、愛するものを笑って(嘲笑や皮肉ではなく)、しかもそれを愛しつづける能力であるが、子供時代には無論、青年時代もこのような余裕(批評精神)と認識力の拡がりはない。中学生・高校生はしばしば、自分を笑われるとすぐにムキになったり、また、自分<sup>6</sup>がもっていない能力をもっているようにポーズしたのである。

自己客観化の程度に応じて、「現実」が正確にとらえられる(「現実」をみる眼)わけであり、(2)でふれた「抽象化能力」とも深いつながりがある。自己も含め現実の意味をとらえ、価値を発見し、大切に育てることができるということは、自己分化の状態であり、自分と他人の心の距離がわかり、それに応じた

言葉づかい（敬語）等もきちんと使いこなせるということである。

#### (4) 「性格」の形成へ

必然的な「闘争の血なまぐささ」を内部に抱えこみながら、青年は、自分の「性格」の模索に立ちむかわなければならない。

「性格」とは心理学の教えるところによると、

「自我」と「気質」とが、青年期の「形式的操作」のおかげで抽象性を獲得し、どんな場合にも、一定のあらわれかたをするように「不動」の態勢をとるようになった「感情」である。つまり、自分に理念が成立し、いつもその理念にもと

づいて行動できる思想と行動の一貫した態度のことである。このような「性格」の芽ができるのは中学生の時期であり、できあがるのは、一般的に高校生大学生の時期であるとされている。

このような「恒常心」としての「感情」＝「性格」は生涯かかっても成立せずに、絶えず具体的な「物・事件・状況」につれて心と体を動かす大人、いわゆる「弱い性格」があることを考える時、この時期の重要性、国語科教育の大切さが今更ながらに痛感させられる。

#### (5) 理想と現実の落差の中で

理想的な人間像、自己の生き方を模索しながらも、青年期には、現実のむつかしさ・厳しさの中で挫折感や失意を味わったり、悩まなければならないことは多い。

中学生・高校生への悩みの調査でいつも高いパーセントを示

すのは、ほぼ次のような点である。

①容貌・体形・性格・能力への悩み、②友人関係（信頼できる友達がいらない、異性との交際、恋の悩み）、③将来への不安や悩み（進路や職業、生き方への悩み、勉強ができない）、④家庭、両親との関係。

ちょっとした経験に過大な評価を与えたり、ひどく驚いたり、また、大人にとってはとるに足らないと思われるささいな失敗に深く傷ついたりするのは、この時期の特質である。人生経験の絶対量が少なく、論理で人生を割り切ろうとする傾向も強い。自らが環境をつくってゆくという大人の能力がまだ不十分な中学生・高校生生の時期には、抽象化能力は発達するが経験は少なく、自己客観化能力も未発達、しかし、自己確立へのエネルギーは激しい……、こうした複雑な心的状況で、新鮮な出会いや感動とひきかえに未来の見えない不安に悩まなければならぬ。わからないという状況や孤独をかかえたままの状態には耐えられず、言葉や理屈で置きかえて安心しておきたいのである。

#### (6) 「自己同一性」をめざして

十分に甘えるということは、全面的に自分に母親にゆだねるということ、それによって人間を愛し、同時に自分も愛されるという原型を獲得することができ、それが人間として一人立ちする大前提だ。

この前提を経て、学校教育の場での生活・教師との出会い・友人・異性との交流等を通して、自己表現や自発性といった社

会生活の原型を体得してゆく。その積み重ねがあつてはじめて、「自己同一性」を獲得してゆくわけである。

その際、子どもの「自己同一性」獲得のための要素として「父親・母親」の役割が非常に重要なことは言うまでもない。「自己同一性」とはすなわち、

父親が少しぐらいかぜ引いていても、会社に出て責任を果たしているとしたら、そういう父の姿を子どもが見ることによつて、父親らしくなろうとする——というように、相手を自分のなかにとりこみ、その相手のようになるということである。

自分が将来どのような人間・大人になるのかの手がかりとなるモデルが身近に存在していることが大切であり、母親なら母親が娘にとって、「人間」として、「女性」として、「母親」としてどう映っているかが問題である。

#### (7) 親との対立と和解・他者との出会い

青年が自己を形成する過程で通らなければならない父性との対立、母性からの自立（孤立ではない）<sup>10</sup>、死と再生のドラマの場面でいつも大きな役割を果たすのは、時代がかわつても家庭・家族（父母、兄弟姉妹等）の問題であり、もう一つは他者（教師、友人、異性……）との出会いであらう。

人間の成長には親との葛藤が必要だ。二・三歳に第一反抗期があつて、とくに重要なのはこの第二期に理想の大人に対して自分を同一化する、つまり、モラルが出てくるわけだ。

ところが、いまの子どもはこの人生のいちばんたいせつな十四、五歳ごろに何をやっているかというところ、もっぱら受験のための勉強をさせられている。普通、男の子だと父親に反抗し、反抗のすえに和解する経路で成熟するのだが、いまは反抗も和解もない。ここがズルズルといつてしまふと、幼児性の段階で成熟が止まつてしまつて、自分でこうして生きていくという意欲のない人間ができてしまふ<sup>11</sup>。

家庭にむける「父親不在」（父性の欠如）のために母親が父性の役割をもつことはありうることである。時にそれがアンバランスな影響を与え、子どもが対決すべき父性や母性のあり方を見失っていることもある。子どもにとって父親は、一般的に言つて、自分の父であり、同時に「社会」（大人の世界）そのものの体現者、「社会」の窓という役割をもっている。家庭にむける父と母の関係をこのような役割とみると、次のような見方をすることもできるだろう。

父親こそ子どもに闘うことを教えるべきだと思いますね。闘うことは、人生何のために生きるか、ということです。人生を闘うこと、生きていくこと、それを教えきつていない。それに対して母親は人生を愛すること、人生を味わうこと、もっと端的に、人生を楽しむこと<sup>12</sup>

一方、他者との出会いとは、家族関係の中で体得した人間関係・愛情や父母の役割・社会性の原型等を他者との関係で、自力で創りあげてゆく段階ということが出来る。多く、異性との

出会いによって、自分の認識が再検討されたり、形成されてゆく。

例えば、『三四郎』（夏目漱石）における三四郎と美禰子、広田先生、与次郎、野々宮さん等の関係や『伊豆の踊子』（川端康成）の中の主人公と踊子の関係もそうである。これまで一緒に暮らしてきた家族とは全く別な他者の存在との対比や関わり（理解しあう喜び、ともに悩む、失恋、挫折、別離、死……）を通して、新しい自分を発見し、愛される側から愛する側へ成長してゆくのである。親との対立、家族との関係を人生へ立ちむかう成長のための、第一の基礎とするならば、他者との出会いは第二の基礎の形成といえることができる。

#### (8) 「弱さ」の本質

幼年期思春期に、それぞれ克服・経験しなければならない発達課題を十分にやりとげずに、身体的には成熟し、年令的には大人になってしまふことが、子ども達に歪みを与えることはいろいろな点から指摘されてきていることである。<sup>13</sup>

例えば、今日の非行少年の特色として、幼年時に必要な甘え（愛情）が不足していたり、逆に、幼年時の甘えの中でその後も育てられつづけたことが次の点等と重なっていることがあげられている。すなわち、遊びを中心とした少年期固有の親密な交流がないか少ないこと、多価的な人間関係をほとんど経験しないで成長してきていること、現実をとらえたり分析したりする時に理性的判断力を働かせるような体験がきわめて

少ないこと等と重なっているとわれている。<sup>14</sup>

言葉と意識という点からみるならば、「関係ないよ」「別に」という言葉に典型的にみられる意識の正体は、自己の独自性を守っているようでいながら、実は狭い自己に閉じこもり、他者の経験をダイナミックに学ぼうとしない臆病で弱々しい「論理」を示しているといえることができる。認識面から考えれば、抽象化能力の未発達、全体的構造的認識の弱さとみることができ。他者の経験から学ぶことがへたな点によく表われているように、現実・現象を言葉によってとらえ、現実の意味をとり出し、自分の生き方や判断に生かしてゆくこと（練習）が足りないものである。音楽やファッション等への鋭い感覚がいつまでも部分的なものにとどまり、人間観・社会観といった全体的で構造的な認識へ発展していかない面もみられる。<sup>15</sup>

#### 注

(1) 桑原武夫『文学入門』（岩波新書、岩波書店 一九五〇年）

六〇ページ。

(2) 拙稿「詩の学習指導（その一、その二）」『高校教育展望』

一九八六・一二月号、一九八七・二月号（小学館）。

(3) 波多野完治『子どもの認識と感情』（岩波新書、岩波書店

一九七五年）一六六ページ。

(4) 注3に同じ。一六二ページ。

(5) 注3に同じ。一九九ページ。



(6) 波多野完治・滝沢武久『子どものものの考え方』(岩波新書、岩波書店 一九六三年) 四三ページ。

(7) 注3に同じ。一八五ページ。

(8) 斎藤茂男編著『父よ!母よ!』(下)(太郎次郎社 一九七九年) 二七五ページ。岩井寛氏の談話。

(9) 注8に同じ。二七六ページ。

(10) 河合隼雄『大人になることのむつかしさ—青年期の問題』(岩波書店 一九八三年)

(11) 注8に同じ。一一三ページ。加賀乙彦氏の談話。

(12) 注8に同じ。二八二ページ。竹内常一氏の談話。

(13) 注8に同じ。次に示す心と体の成熟のアンバランスと精神生活との関係は、非行少年に限らない問題を含んでいると思われる。

いまから数十年まえに私が少年院の調査をしたときわかったのは、非行少年は一般少年に比べて、からだがか早い時期に成熟するが、ハイティーンになるとそれが逆転して、成熟が遅滞する傾向があることだ。私たちはこれを「早熟遅滞現象」と呼んでいる。この現象は子どもにさまざまなゆがみをもたらす。つまり、ローティーンでは身体はおとななのに、精神生活が未熟で幼いままであり、ハイティーンになると身体的な劣等感から暴力的非行に走ったりする。性的には何もかも知っているように見えながら、じつは内面生活は赤ん坊のように未熟で、

早熟でありすぎたために、どこかギクシャクしてうまくいかない。そういう点でも、非行少年少女は悲惨なのだ。

(14) 坂元忠芳『少年期における発達の特徴と教育』『岩波講座子どもの発達と教育5』(岩波書店 一九七九年) 四八ページ。

(15) 現代の中学生・高校生には実利的・現実的・権威無視・契約尊重等といった特徴の他、よく「常識」がない等といわれる。

「共通感覚、コモンセンス」という観点から中村雄二郎氏は、現代の青年達が直面している問題について次のように述べている。

(たとえば、ゲーテの時代には『若きウェルテルの悩み』をはじめとするその作品や手紙によって、当時の青年達に感受性や感情の表現について整え、方向づける範型が与えられていたのに) そういう感受性や感情のはっきりした範型がないままに、それ自身不安定な多くの疑似的な、かりそめの型の氾濫のなかで、みずから諸感覚を統合するすべを手さぐりしなければならないころにあるといえるだろう。

「自明性の地平の喪失」ともいいかえている。「青年期の延長と共通感覚」『岩波講座子ども発達と教育6』の「月報」(岩波書店 一九七九年)

### 三、「くるみ割り」の表現の特質

#### (1)「くるみ割り」と高校生

文学作品（ここでは小説）の良い読者を育てるためには、生徒の「成熟過程」を考えあわせながら、第一に、小説の面白さ、魅力に気づかせることが必要である。

このような観点からみた時、小説の魅力を知らせる優れた小説の一つに「くるみ割り」（永井龍男）をあげることができる。この小説は、かつて中学二年の小説教材として位置づけられ（一九七八年～一九八三年光村図書）、様々な実報報告も提出されている（詳しくは、別稿で考察する）。

私は、「くるみ割り」は生徒に小説の魅力に気づかせ、自分の生き方や性格等について考えさせ、読書や人生への視野を広げる小説の一つとして、有効な作品だと考える。しかも、学年的には、（ねらいや扱い方にもよるが）中学二年生よりは、高校一年生頃の方が、より適切なのではないかと考えている。別稿で、高校一年生の「読み」の実際について詳述したが、高校一年生は、しみじみと、大変喜んで「くるみ割り」を読んでいる。以下、五項目にわたって「くるみ割り」と高校一・二年生の関係について述べてゆく。

#### ①テーマの切実さ

家族とはどうあればいいのか、父・母とどのように関わればいいのか、また、大人になる（成長する）とはどういうことな

のかについて、高校一・二年の時期は、中学二年や高校三年とは違った重みで、真剣に考えはじめている。

高校受験という嵐の時期を過ぎて、多くは、親も本人も安心、就職や大学（短大）等の受験まではまだ間がある……。高校一・二年頃は、新しい生活に飛びこみ、今を生きながら、未来を模索しはじめる。部活動・勉強・学級活動等の新鮮な体験を通して、人生の喜びを味う反面、新たな対立や悩みとも直面せざるを得ない。容貌・才能・友人関係等の日々の悩みの他に、あと一・二年後の就職・進学といった人生の岐路にむけての判断をどうするか、重くのしかかっている。高校受験の時の高校の選択とは全く違う重みで……。

「くるみ割り」の世界は、こうした時期に遠くない過去の自分の体験のミニチュアとして、親しく受けとられるだろう。また、この小説のもつあたたかい人間観は、現在の自分の生活を検証させながら、将来への希望や成長への願いを、より確かなものにするだろうと思われる。

#### ②題材の身近さ

家庭における人間関係に悩むことが多いこの時期、しかし、まだ自立した大人としての成熟をもたない高校一・二年生にとって、家庭・家族にむける人間関係（環境）を自力で形成してゆくことはできない。理想と自分の未熟さ・無力感（意志の弱さ、確固とした自分を言行一致で示せない不安……）の間で引き裂かれている場合も多いのである。特に、自己形成のため

の要素として、父性・母性の存在とあり方は、重要な役割を果し、彼等は、少年から大人へという過渡期にあつて、めざすべき父性・母性のあり方を求めているのである。

「くるみ割り」は、基本的に家庭対個人（主人公）の対立という構図をもつ作品であり、このような構造は、国家対個人の対立という構図の作品（例えば『舞姫』森鷗外、『野火』大岡昇平等）よりも、きわめて親しみやすい型の作品だろうと考えられる。

また、母の病死・姉の結婚・父の苦勞と愛情・少年のわがままや感謝等は、いずれもごく日常的な事柄であり、自分のこと、家庭の問題と引きつながら読むことができるだろう。

### ③主人公の少年の姿への同化しやすさ

自らに類似した体験があることは、小説をより楽しく読ませる。この作品で描かれる少年の子ども心、わがままや不安な心理等は、形こそちがっていても、ほとんどの生徒が体験してきているものであり、共感をもって読むことができるだろう。

### ④分量の手頃さ

この程度の分量であると、思考の負担が少なくてすみ（表現のわかりやすさも理由であるが）、読者として、ストーリーの面白さにとどまっている生徒も一気に読み通し、さらに、表現の細部を考える余裕もでてくるはずである。

### ⑤表現上の特色

表現的には、心理描写と会話・語り（説明）という技法が中

心になっており、小説の表現に慣れない読者にもわかりやすい。また、ハッピーエンド、人格形成小説の構成をもっており、こうした構造は、この時期の生徒にうけ入れやすいだろうと思われる。

小説を読み慣れている生徒の中には、登場人物達が多量に善意の人ばかりであることや、主人公が人生の困難をたやすく乗りこえてしまふ点に、かえって、つくりものめいた不自然さを感じることも予想できる。

しかし、このようなことを感ずる生徒は、人生のより深く広がりのある問題に立ち向かう知的好奇心（向上心）をもちはじめている証拠であるから、自分の人間観・家族観形成のための一つの材料として、批判的に読むことができるだろう。また、虚構（フィクション）や悲劇的構成の作品の意味や面白さについて知らせたり、細部の表現の効果を分析的に検討する見方を習得させることもできるだろう。

### (2)「人格形成小説」と心理描写

「くるみ割り」の表現・構造には次のような特徴を指摘することができる。

①舞台背景が家庭（家）であり、個人と家族との心理的対立・葛藤が描かれている。②中心人物（主人公）は少年であり、人生への目覚めと出発の中での人間性（人格）の成長の記録が語られる。③小説の中心は、少年の回想部分であり、その部分を包む形で、プロローグ・エピローグがある。それは、数十年後

までも決して忘れることのできない過去の思い出として、すでに大人となっている主人公の語りによって表現されている。④主人公は少年であり、心の成長の記録という性格から、父性・母性との対立や和解という要素が入っていること。また、主人公の個性は、強烈でユニークなそれではなく、平凡で日常的な親しみやすいものであること。⑤きわめて緊密な構成をもつ短編小説であり、会話・心理描写・感覚的表現・象徴的表現等も巧みであること。⑥構成的には、ハッピーエンドによって、成長過程の心理的葛藤や判断・生きぬく勇氣等の価値、つまり、平凡な主人公の中の非凡な人間性（愛情・勇氣等）を保証しているということ。すなわち、主人公の死や挫折という結末（悲劇的構成）によって、個性的な主人公の死に至るまでの凝縮された闘争のイメージ、果敢な精神の崇高さ等を鮮明にする形式の作品ではないということである。

このような構造をもつ作品は、少し概念の枠組みを拡げて考えると、『ヴィルディングスロマン』（人格形成小説、発展小説、教養小説）という型の小説ということが出来る。この型の小説は世界の文学の中にも、日本の小説の中にも多い。

『ヴィルディングスロマン』とは、一八世紀ドイツ市民社会において、ギリシア思想の影響のもと、人間形成(bildung)市民としての人間形成を意味する)の理念が生まれ、それを主題とした一連の作品をさす。ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』（一七九六年）がその典型的作品とされていること

はよく知られている通りである。この小説の母体になったのは、国民劇場の創設をめざして演劇の世界に身を投ずる市民階級出身の青年を主人公にした『ウィルヘルム・マイスターの演劇的使命』（一七七七―七八年）である。当時のドイツでは、市民階級はまだ政治的影響力をもたず、自らの教養と人格を高める手段からは遠ざけられていた。市民階級の教養を高める手段として、国民劇場の創設を叫ぶ声の高まりを背景に、この『演劇的使命』は書かれたが、公表されることなく、後、『演劇』のテーマよりも、富裕な商人の息子ウィルヘルム・マイスターの広い世界に生きる調和のとれた人間としての人格形成の過程が中心として描かれることになった。ウィルヘルムは、多くの人間関係の中で失敗や幻滅を繰り返しながら、真の生き方（全人格的な自己形成）の探求をつづけてゆくのである。

ドイツにおけるこのような作品系列には、『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』（ノヴァーリス、一八〇二年『青い花』のこと）『縁のハインリヒ』（ケラー、一八七九―八〇年）『デーミアン』（ヘッセ、一九一九年）『魔の山』（トーマス・マン、一九二四年）等がある。ドイツ以外で代表的な作品としては、『ディヴィッド・コッパフィールド』（ディケンズ、一八四九―五〇年）『感情教育』（フロベール、一八六九年）『ジャン・クリストフ』（一九〇四―一二年）等の他、日本では、『友情』（武者小路実篤、一九一九年）『こゝろ』（夏目漱石、一九一四年）『伊豆の踊子』（川端康成、一九二六年）『若い詩人の肖像』（伊藤整、一

九五五年)『あすなろ物語』(井上靖、一九五三年)等も、「人格形成小説」としての構造をもっていることができるだろう。

「人格形成小説」の性格を簡潔にまとめると、「主人公が環境から影響をうけたりそれと闘ったりしながら、自己を完成させていく教養過程を描く小説」<sup>2</sup>「主人公が、彼の生きている時代のなかで、種々の体験をしながら成長発展し、人間として自己形成をしてゆく過程に重点を置いたものである。それは伝奇や冒險、風俗や性格、筋の面白さ等を主にしたものではない。それらの要素は、もちろん含まれるが、すべては主人公として選ばれた人物の人間形成を中心にしてのことである。」<sup>3</sup>といえよう。

これ等の小説の主人公の生き方は、初めから理想をめざして描かれ、主人公はたいがい裕福な場合が多い。人格成長のきっかけとなるのは失恋(青春小説という要素)や親・家族との対立(家庭小説の要素)、友人(ある他者)、文化との出会い等である。

つまり、思春期・青年期に誰もが出会わなければならない人生の諸問題が、(平凡だが理想をめざす主人公の成長過程として)典型的で象徴的な事件として、日常性の中で描かれてゆくのである。<sup>4</sup>

表現としては、語り(説明)と心理描写が中心になって、成長の心の記録が描かれてゆく。語り(説明)は古典的表現方法だが、心理描写は、人間の不可解な心理(人間)探求という人々

の要求から生まれた技法であり、恋愛心理の表現として発達してきた。一般的に、近代的な心理描写小説の創始は『クレイヴの奥方』(ラ・ファイエット夫人、一六七八年)とされている。これは、人間が集まって生活する時(ここでは、社交界のこと)、それを支配するものは心理的な関係性であるという考え方から、そうした心理の交錯を描いたものである(善悪、愛と憎しみ、見栄や才能の誇示等の交錯)。

書簡体小説(手紙形式の小説)は、こうした心理描写(告白形式の)の古典的な小説技法の一つで、『こゝろ』(夏目漱石)の「下、先生と遺書」はその代表的な作品といえることができる。

高校生が『こゝろ』「下」を愛読し、深い感銘を受ける理由の一つに、手紙という形式(告白)の親しみやすさ、直接相手の心理を語りかけられる現実感(説得力)を利用して、死(自殺)に至る心の記録が語られる点にあるだろう。金銭を介して人間に裏切られ、人間不信に陥った被害者としての主人公が、今度は、恋愛(女性)を通して親友を裏切り、結果として自殺にまで、その親友を追いこむことになる。人生の被害者としての自分分は、いつの間にか他者を傷つける加害者になっているという人生の恐ろしさの表現もまた、高校生に多くの問題を投げかけるが……。

## 注

(1) 文学的文章の指導の中に「人格形成小説」を位置づけ、教材の体系的性を考察したものに、市毛勝雄『文学的文章で何を教えるか』（明治図書 一九八三年）がある。

(2) 福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典—改訂増補版』（研究社出版 一九七八年）三五ページ。

(3) 手塚富雄『ドイツ文学案内』（岩波書店 一九六三年）九三ページ。

(4) 川本静子『イギリス教養小説の系譜』（研究社出版 一九七三年）は、イギリスの教養小説を「紳士の人間形成」から「芸術家の自己確立」への変貌の過程としてとらえたものである。この中で、氏は、主人公が遭遇する三つの試練として、「父の試練」「女による試練」「金による試練」をあげている。

## 四、永井龍男の表現

ここでは、「くるみ割り」の表現への理解を深めるため、先行研究によりながら、永井龍男の小説技法や背景等について簡単にふれておく。

永井龍男は、深い現実洞察力に支えられた作品によって、「短編文学の名手」（河盛好蔵「解説」『永井龍男・阿部知二へ日本の文学62』一九七四年 中央公論社）等といわれている。作品に共通した特徴としては、日常の中の人生の凝縮した瞬間をと

らえ、感情を抑制した表現によって、無駄なくその情景を描き出す。精巧なストーリー展開、緊密な作品構成、人物のさりげない会話や心理・行動描写、感覚的な、あるいは暗示的象徴的な表現によって、人生の哀しみを描くのである。

### ①文学的出発

永井龍男は一九〇四年東京市神田区猿樂町に、四男一女の末弟として生まれる。小さな印刷所の植字工の父をもち、貧しさのため、高等小学校より先へは進むことはできなかった。一四歳の時奉公に出るが病気になる、家で本に親しむ。一五歳、父を失う。

一九二〇年九月（一六歳）に、文芸雑誌『サンエス』の短縮小説の懸賞や、一九二二年二月（一八歳）『帝劇』に一幕物の脚本を応募したのも、家計を助けるためであった。菊池寛、樋口一葉の影響等をうけている。『社会の下の方に住む者の現実的な眼、曇のない眼から、文学的表現を打ち出す、これがその環境に負けずに、胸を張った十六歳の永井さんの姿なのである』。この精神と方法は、一般的に処女作とされる『黒い御飯』（一九二三年七月号『文芸春秋』）から、晩年の『青梅雨』（一九六五年九月『新潮』）まで、一貫している。

### ②文学的青春

一九二四年二月、二歳年長で当時一高三年生的小林秀雄と知り合い、同人雑誌『青銅時代』『山繭』等で富永太郎や中原中也等の文学的交友の中で、その文学的な理想の高さ等に惹かれて

ゆく。

戦争中は一年一作位の割で作品を発表している。『オール読物』『文芸春秋』の編集長を経て、一九四四年文芸春秋社専務取締役役に就任する。

### ③「くるみ割り」の頃

当時は、一九四七年の公職追放令により（文芸春秋社における前歴が該当）新夕刊新聞社を退社。文筆生活を余儀なくされたこともあり、以後本格的な作家生活に入った。この二年程は、とりわけ生活が苦しく、少年雑誌に寄稿して生計をたてている。その間の事情は、数少ない私小説の一つ「そばやまで」（一九五一年五月『別冊文芸春秋』）に描かれている。一九四八年五月、四四歳の時、公職追放令は解除される。「くるみ割り」はこの年の七月に発表された。

翌年八月「朝霧」（『文学界』）を発表し、第二回横光利一賞を受け（一九五〇年四月）、作家的地位を確立することになる。

横光利一は、「日本語も磨けばさまざまな色を浮かべるものだ<sup>2</sup>」と永井文学のシンボリズムにふれたが（処女短編集『絵本』一九三四年六月、四季社）、井伏鱒二も「くるみ割り」前後の作品について、「物語の頂点となる箇所には省略の妙味を見せている。抑揚がないやうで反って大いにあることになる。」と述べている。「朝霧」における孤独な老人の描写、末尾の朝霧による象徴化の表現等の他、「青電車」（一九五〇年八月号『新潮』）「冬の日」（一九六五年五月号『新潮』）「密掛」（一九五八年二

月『別冊文芸春秋』）等はその典型的作品といえることができる。光・色彩感覚的表現による暗示性、象徴的表現の描写力には、俳人としての現実把握力や象徴派文学理論の影響が認められる。

### ⑤庶民性と親しみ（①と関連）

永井龍男の作品の登場人物は、いずれも市井の人々（生活人）であり、無垢な少年や女性、中年男や老人等の心理が描かれる。河上徹太郎は、このことについて、彼の育ち（神田っ子）に基づく市民的感受性から出発したものであり、「庶民といっても当世風のマスコミ的十把一からげの民衆の一人ではない。痘性で、誇りが高く、道義的にも潔癖で甚だ個性的である。その点むしろ貴族的ですらある。」と述べている。<sup>4</sup>

また、永井の作品の「読者に何か特殊な親しみを覚えさせる」力について、井伏鱒二は「卑俗に対する彼の『はにかみ』（略）、これは自己批判の気持ちといったようなものにも関連を持つが、永井君の場合は、とりわけ泥くささに対する『はにかみ』」であると述べている。<sup>6</sup>

### ⑥人生の「悲痛」

阿部知二は、永井の作品について、具体的な作品名をあげなかったが、「君の作品というものは悲しいものをもっているね。それは悪い意味じゃなくて、悲痛なんだよ。」と述べ、円地文子<sup>7</sup>は、永井の小説には「いつも死という人生の一大事が投影している、そのことが何げない形のなかに深く沈んでいる重さを感じ

させる。／＼輕妙とか酒脱とか呼ばれる巧さとは質の違ったもので、私などはそこに惹かれる。」と語っている。

このように、永井龍男の小説の方法は、常に人生の根源的な部分に眼を凝らして、それを、日常生活の中の特微的な情景から選り出して、象徴的に切り取るという表現方法であり、結果として、人間や人生の「悲痛」な部分、生と死のぎりぎりの部分等をえぐり出すことになったと私は考えている。狂人や気が狂いかけた主人公・自殺しようとする人物、あるいは、男女の別れの場面等を描くことによって、真の現実の豊かさやうす気味悪さを描こうとする作品がそれである。

#### ⑦「自然」の浄化力への信頼

佐伯彰一は、永井の短編作法について「密拊」を例に分析している。この中で、永井の小説の基調は「人生の小さな劇的な瞬間」を描くことであり、そこに生まれる人間的な情念や欲望・衝動の対立場面へ「自然の生命」を導き入れることによって、「自然」の浄化力・救済力への信頼を示し、作品を完結させていると述べている。「密拊」の場合には、鮮明な密拊が「自然の生命の象徴として別離の胸苦しさを救い上げる役割」を果たしており、こうした手法のために、読後のすがすがしさが生まれていると述べている。

このような見方に立てば、「くるみ割り」の「くるみ」（自然）が象徴的役割を果たしている他に、少年の心の成長（自然）への信頼感がこめられているということもできるだろう。

#### 注

- (1) 大岡昇平「永井龍男―人と作品―」『中山義秀・永井龍男  
〈現代日本文学館33〉文藝春秋社 一九六八年』『大岡昇  
平全集一二巻』中央公論社 一九七四年)
- (2) 『文学界』（一九三四年八月号）
- (3) 「解説」『永井龍男・井上友一郎・織田作之助・井上靖集  
〈現代日本文学全集81〉』筑摩書房 一九五六年一二月）
- (4) 「永井龍男論」〔『新選現代日本文学全集10』筑摩書房 一  
九五九年一〇月）
- (5) (6) 注3に同じ。
- (7) 対談・永井龍男阿部知二『日本の文学』（中央公論社 一  
九六七年）
- (8) 月報「お花見」『永井龍男集〈筑摩現代文学大系56〉』（筑  
摩書房 一九七七年三月）
- (9) 注8に同じ。「人と文学」